富士
特殊紙業

水性印刷で脱炭素社会に貢献
組織・働き方改革で企業価値向上

▲杉山真一郎社長

食品パッケージ製造・販売の富士特殊紙業（愛知県瀬戸市）は1950年の創業以来、食品パッケージを通じて食の安全･安心や消費者の利便性向上、環境問題などに取り組んできた。98年には業界に先駆け、水性グラビアインキの実用化を実現。二酸化炭素（CO2）や揮発性有機化合物（VOC）の排出量削減など環境負荷の低減と、労働環境の改善につなげている。世界が〝脱炭素社会の実現〟に向けてアクセルを踏む中、水性印刷のさらなる飛躍を期してその技術とノウハウを磨く。

「SDGs」や「ESG」などが企業経営における大きな指標となっている現代。とりわけ環境保全の取り組みは、全地球的な課題として企業が対峙していかなくてはならない項目であり、食品業界もその例外ではない。

食品包装においては近年、バイオマス素材への注目度が高まっているが、「印刷における“脱炭素”や“CO2排出量削減”を言うならば、当社の水性印刷が圧倒的な優位性を誇る」と杉山真一郎社長は語る。

同社の水性印刷は、従来の油性グラビアインキから水を多く含む水性グラビアインキに転換することで、印刷工程におけるCO2排出量削減や、揮発性有機化合物（VOC）の使用量、排出量の大幅削減を実現。CO2排出量は、油性グラビアインキと比べ約44%、バイオマス油性グラビアインキと比べても約37%抑制できる。

食品業界においては残留溶剤への関心も高いところだが、水性印刷は臭いを抑制する効果も大きく、消費者だけでなく、製造の現場で働く人々にも安全・安心を担保できる。

「ユーザーの声に応え、バイオマス素材や紙素材などと水性印刷を組み合わせた提案もさまざま用意している。ただ、水性インキからバイオマスの油性インキに変えるのは、環境取り組みとしては逆行することになる」と、ユーザーにも、また視野狭窄に陥りがちな業界にも警鐘を鳴らす。

「水性印刷が環境に良いというのは皆さん分かっているが、導入するには何らかの客観的、公的な指標が欲しいとの声も多い。特にLCA計算（＝ライフサイクルアセスメント）やノンソルベント（無溶剤）などの数字を出して欲しいと言われている。こうした点をクリアし、水性印刷の特性や環境施策における優位性などを広くPRすることで、社会的な認知を高めていきたい」とする。

水性印刷とともに、同社が最注力製品として提案強化を進めている横方向開封ピロー「スマートカット®」及び同技術を活かした「スマートカット®ジッパー袋」、新規事業のスパウト容器なども製造設備を増強。環境にやさしい製品作りを推し進める。

20年10月からは、組織改革と働き方改革をスタートさせた。組織改革では、営業・開発一体型の顧客提案体制を整備。働き方改革では「4勤2休」を本格導入し、従業員満足度アップを図った。雇用環境・労働条件の改善による生産性向上や、リクルート活動にもつなげていく。